平和の使者派遣事業に参加して

師勝中学校　三年　児玉　賢祐

私は八月五日から二日間、広島平和記念式典に参加する平和の使者として広島に行きました。そして、厳島神社や平和記念資料館などを見学しました。中でも印象深かったのは原爆ドームです。原子爆弾は現在の原爆ドームの近くに落ちました。近くの他の建物は、ほとんどが崩壊しましたが、原爆ドームだけは崩れずに残りました。なぜ崩れなかったかというと、屋根やドーム部分の多くは木材で作られていたので、真上からの爆風に対して先に屋根がつぶされて爆風が突き抜けたため、完全には押しつぶされなかったからだそうです。

一九四五年八月六日八時十五分、広島に原子爆弾が落とされました。町は火の海となり、川は死者で埋まったそうです。原爆により両親を亡くした子どもたちは、二千人から六千五百人と言われています。私と同じぐらいの年の子や、もっと幼い子どもたちが、頼る親戚もなく靴磨きなどをして暮らしていたそうです。食糧の確保も難しく、飢えによって多くの子どもが亡くなっていきました。多くの死者を出し、現在に至るまで原子爆弾による放射能で苦しんでいる人がいます。にもかかわらず、今この瞬間も原子爆弾を保有していたり、新たに作ろうとしている国がたくさんあることを知りました。私にはそれが信じられません。

今回、広島平和記念式典には、たくさんの人々が参加していました。全国各地の小学生からお年よりの方までが、平和を願いに広島までやって来たんだと思いました。式典での平和への誓いの中に「原子爆弾や戦争の恐ろしさと悲しい体験を、一人でも多くの人たちに伝えることが、私たちの使命です。あの日苦しんでいた人たちを助けることはできませんが、未来の人たち助けることはできるのです。」という言葉がありました。この時、私は大切なのは伝えていく事だということ、それが一番重要だということに気付きました。そして、改めて平和の使者という役割の重要性を実感しました。

また、式典には多くの外国の方がみえていました。日本だけではなく海外の方も広島での悲劇に関心を持っていることがわかりました。そこで私はそういった方々と協力し世界中が戦争のない平和な社会となるように努力していきたいです。そして、その思いを平和の使者としてみんなに伝えていきたいです。

原爆と向き合って

西春中学校　三年　野崎　愛菜

想像してみて下さい。昭和二十年八月六日午前八時十五分、広島に原子爆弾が投下された、あの日のことを。たった一発の原爆によって、たくさんの尊い命が失われました。そして、人々は身も心もボロボロになりました。今の今まで、一緒に居た人が、一緒に話していた人の命が、一瞬にして消えていくのです。みなさんには、こんな現実が想像できるでしょうか。きっと、できないと思います。なぜなら、私たちにとっては考えられない。まさに、有り得ない世界だからです。

私は、「原爆は恐ろしいものだ」と、頭では分かっていても、実際はあまり実感がわきませんでした。しかし、広島の資料館を訪れて自分の目で見ると、原爆の恐ろしさがひしひしと伝わってきました。

資料館には、当時の状況がよく分かる写真や資料がたくさん置いてありました。しかし私は最初、それらの写真を直視することができませんでした。それはきっと、自分の中に暗い現実から逃避しようという考えがあったからだと思います。でも、そんな考えを捨ててそれらの写真を見ると、なんだかその中に吸い込まれていくような気分になり、一枚一枚の写真の前で立ち止まってしまいました。なぜだか分からないけれども、その写真から目が離せなくなるのです。見れば見るほど、一枚の写真から沢山の思いが伝わってきます。見れば見るほど、どんどん悲しい気持ちになります。鳥肌が立ちます。自分では表現することのできない感情が次々に押し寄せてくるようでした。資料館を見終えた後出てきたのは、感想ではなく、ため息ばかり。残酷過ぎて言葉になりません。私は、真正面から現実をつきつけられた気分になりました。

なぜ、あんなことが起きてしまったのでしょうか。なんのために、起こす必要があったのでしょうか。今私が言えることは、どんな理由があろうとも、決して核兵器はあってはならないものだということです。

式典の平和への誓いで小学校六年生の二人がこんなことを言っていました。

「私達はあの日苦しんでいた人たちを助けることはできませんが、未来の人たちを助けることはできるのです。」

「自分の受けた苦しみを他人にぶつけても何も生まれない。憎しみや悲しみの連鎖を自分のところで断ち切る強さと優しさが必要。」……と。

広島で学んだ二日間はとても良い経験になりました。だからこそ私は、もう二度とこんな悲しいことが起きないように、学んできたことを友達や周りの人たちに伝えていきたいと思います。明るい未来であるためにも……。

平和への願い

白木中学校　三年　西沢　美紀

私たちは北名古屋市の「平和の使者派遣事業」で八月五日～六日に広島を訪れました。

初日に平和を願う千羽鶴を届けるために平和記念公園を訪れました。次に平和記念資料館を訪れましたが、館内で上映されていたビデオはとても衝動的でした。また、数多くの展示物の中では、溶けて変形した一升瓶、焼けこげた衣服、当時の写真などが印象に残りました。衣服のほとんどは焼けこげてボロボロになり、血の跡も残っていました。それもほとんどが子どものもので、悲痛な思いをした子どもが多くいたことがわかりました。しかし、私が一番恐怖を感じたのは、被災者の様子を表したジオラマでした。皮膚が焼けただれ、髪の毛がこげ、静止をさまよっている地獄絵を見て、見学客の誰もが息をのみました。その空間は異様なほどの静寂に包まれていました。私もあまりのむごさに呆然としました。

平和記念式典で花を供えられたことはよい体験でした。黙とうの間に鳴らされた平和の鐘の音は、私の心にいつまでも鳴り続けることでしょう。平和への誓いでは、子どもの代表の訴えに会場から惜しみない拍手が送られ、私も大変感動しました。原爆や戦争の恐ろしい事実を後世に伝えることが自分の使命だと改めて思いました。

私は今まで戦争や原爆は過去のものと思っていた部分がありましたが、平和記念資料館や原爆ドームを見学し、平和記念式典に参加し、原爆がいかに恐ろしいものであるかを痛感しました。同じ悲劇を人類が味わうことのないよう、原爆は封印されなければならないと思いました。

戦後六十二年経った今でも被爆の後遺症に苦しんでいる人々やその家族を思うと、戦争とはその時だけでは終わらない悲惨すぎる過ちです。戦争も原爆もごめんです。自分の国を守るために原爆を持つのではなく、他の国を守るために原爆を捨てる、そんな平和な時代を自分たちの手でつくりあげていく世界を望んでやみません。六十二年前の八月六日八時十五分が私たちに残してくれた教訓を大事にしたいと思います。

原爆が教えてくれたもの

訓原中学校　三年　柴山　貴弘

僕たちは、八月五日から六日まで北名古屋市の「平和の使者派遣事業」で原爆について学ぶために広島を訪れました

前日に平盆まつりで、市長さんや議長さんから平和の記と千羽鶴を伝達されたり、平和の火のリレーをしました。初めての経験でしたので、とても緊張しましたが、明日からの派遣の大切さを感じました。

一日目は、広島の宮島を訪れて、厳島神社を見学した後、平和記念公園内に千羽鶴を奉納しました。さらに、広島市立美術館に行き、さまざまな作品を鑑賞しました。

僕が一番印象に残ったのは、広島平和記念資料館で原爆が落ちた当時の様子を見た時です。全身やけどになった人や皮膚がはがれてしまった人など見ているだけで胸が痛みました。そして、胸が痛むと同時に悲しさと怒りが込み上げて来ました。

二日目は、広島平和記念公園に、式典参加のために行きました。広島平和記念式典での平和の誓いで、「自分の受けた苦しみや悲しみを他人にぶつけても、何も生まれません。」という言葉が心に突き刺さりました。この言葉は、いじめから戦争まで幅広い場面でも言えると思います。

例えば、新聞やニュースで毎日流れている凶悪犯罪や虐待やいじめの問題など、このような人のことを考える気持ちがあれば、必ず無くなっていくと思います。この思いを学校生活の中で友達に伝えていきたいと思います。

この二日間の経験を通して、どんな事情があったとしても、罪のないたくさんの人々を苦しめたり、原爆も戦争も起こしてはいけないと胸に刻む必要があることを学びました。

この事業の目的は、平和意識の高揚を図ることでした。これからは、戦争という悲惨なことが起こらないように、出来るだけ多くの人に伝えていきたいと思いました。そのためにも、多くの生徒が参加できるように、派遣事業を続けてほしいと思います。

平和の使者派遣事業に参加して

熊野中学校　三年　溝口　綾乃

「一度見ておきなさい。」と両親に連れられ小学四年生の時に広島を訪れました。

初めて平和記念資料館を訪れたときは、熱線で溶けたガラスびんや、壁に焼きついた人影、悲惨な写真や展示品の数々に、ただ目を覆いたくなるばかりで、本当にこの地で起った事が信じられませんでした。

あれから五年の月日が流れ、今回「平和の使者」として再び広島を訪れる機会をいただきました。前回よりも、中学校で歴史を学んだこともあり、知識を重ね合わせながら一つ一つの資料を丁寧に時間をかけてみることが出来ました。このような悲惨な出来事があったにもかかわらず、核兵器は今だ世界から無くなるどころか増え続けているのが現実です。私達は、世界で唯一の被爆国であることを自覚し伝えていく事が出来ていただろうか。何も出来ていない自分たちがとても恥ずかしく思え、見学し終えた頃には、言葉を失いしばらく誰も話す気にはなれませんでした。

次の日の平和式典では、私が思っていた以上にたくさんの外国の人々が参列していました。日本人の中では、終戦から六十二年がたち、まるで遠い昔の事のように忘れられつつありますが、外国の人達の方がはるかに関心が高い事に驚きました。

戦後、日本は目覚しい復興をとげましたが反面、人々の心は貧しくなったように思います。心無い同世代の若者による千羽鶴の放火や記念碑への落書が起こるたびに心が痛みます。

今の平和は、多くの人々の犠牲の上に成り立っている事を忘れてはなりません。二度と同じ過ちを繰り返さないためにも、日本国民が中心となり世界中に核兵器廃絶と反戦を訴え続けなければならないのです。そしてこの惨劇を後世に語り伝えていく事が、戦争を知らない世代の私達に与えられた重大な使命だと感じました。

ぼくの見たヒロシマ

天神中学校　三年　藤岡　将大

一九四五年、八月六日午前八時十五分、広島は世界で初めて原子爆弾を投下されました。町は破壊され、多くの人々の生命が奪われました。ぼくは、それから六十二年後の同じ時間に原爆が落ちた場所で被爆者に黙とうを捧げました。

平和祈念式の前日、千羽鶴を納めに会場に出かけました。そのときは原爆の被害にあった人々はかわいそうだなぐらいにしか思っていませんでした。しかし、平和祈念式の当日、同じ会場に足を踏み入れると、前日には感じ取れなかった雰囲気に包まれた気がしました。それは被爆者の苦痛の思いやその場にいた遺族の思いのように感じました。この日、同じ敷地内にある広島平和記念資料館を見学しました。焼けこげてしまった服や黒こげになった弁当箱、爆風で折れ曲がってしまった鉄扉、溶けた一升瓶など、それぞれが原爆の恐ろしさを物語っていました。ぼくは、以前ガラス工芸をしたことをこのとき思い出しました。ガラスを溶かすときは、離れていてもとても熱かったことを覚えています。その熱さが町全体を襲ったことを想像するだけで、とても恐ろしくなりました。

広島から帰ってテレビをつけると、ちょうど原爆についての特集をしていました。そこでは、日本とアメリカの原爆に対する考え方の違いが放送されていました。日本は「原爆は絶対使ってはいけない物」と多くの人が思っています。それに反して、アメリカは「原爆は戦争を終わらせるための最良の手段で、原爆を使わずに、あのまま戦争を続けたら、もっと多くの被害者が出ただろう。だから、原爆を投下して、戦争を終わらせたのはよかった。」という考え方をしています。それを聞いて深く考えさせられました。何が正しくて何が正しくないのか分からなくなりました。しかし、確かに言えることが一つあります。戦争は絶対にしてはならないということです。

平和への誓いの中でこんな一文がありました。「私たちは、ヒロシマを『遠い昔の話』にはしません。」本当にその通りだと思います。世界中の人々が被爆者の痛みを知り、戦争は絶対に「ダメだ」ということを世界中に広めていかなければならないと思います。

罪なき命が奪われる戦争。そんな無意味な戦争が早くなくなることをぼくは、願い続けます。